

令和3年度第1回大郷町総合教育会議 会議録

日時：令和3年12月21日（火）

午後1時～

場所：大郷町役場3階第3委員会室

【出席者】

(教育委員会)

教育長・武藤職務代理・高橋（幸）委員・高橋（賢）委員・及川委員

菅野学校教育課長・赤間社会教育課長・金指導主事

(町長部局)

田中町長・遠藤総務課長・近藤補佐

【欠席者】なし

1. 開 会 【進行】 遠藤総務課長 (1:00)

2. あいさつ 田中町長
(省略)

3. 議 題 運営規則第3条により町長が議長となり進行

議 長 「(1) 行きたくなる学校づくりについて」を事務局から説明願う。

指導主事 (行きたくなる学校づくりについて概略を説明)

議 長 行きたくなる学校づくりについて質問・意見があれば願います。

武藤委員 事業をやるためには、先生がどう取り組むかが大事。何のために、将来的に何を目指してやるのか。先生の負担や周知方法はどうなっているか。手に余る部分があったら、町として、どう手助け出来るのか。

指導主事 先生方には研修会を実施している。令和2年度から、学校に対し、取り組み説明を2回行った。今年度から指定を受け、異動してきた先生もいるため、4月・5月にも取り組みを説明し、計画も一緒に作った。先生の負担に関する質問について、この事業は特に目新しいものではない。学級づくりや行事、授業の中で、普段から取り組んでいることそのままやってもらうのが、この事業。新しいことを始めるのではない。研修会で先生方お願いしたのは、居場所づくり・絆づくりは初めてのものだから、やり方を意識して、普段の学級づくりや行事、授業で試してもらうよう話した。負担があれば一緒に手伝う。

議 長 昔と今は、環境が全然違う。山学校とって、天気がいいからとガキ大

将に引っ張られて、途中で遊びに行つて、家で怒られたり、そういう学校の先生と子どものやり取りが、今は厳格過ぎる気がする。枠にハマないと駄目で、子どもとの関わり、絆の持ち方が分からない先生も多いのでは。

教育長

昔と今は、バックボーンになるものが違う。行きたくなる学校づくりは、子ども達の声聞きながら進める事業。普段の学級づくりや授業づくりについて、子ども達からアンケートを取つて、時にはコメントを求めながら、受け入れながら進める事業。子ども達の心の声を聞きながら、距離を縮めていければと思う。資料P12の意識調査は、小学校は5・6年生以上に年3回、質問を投げかけている。「あてはまる」が増えれば、先生方が子ども達に取り組みうとしている手段が浸透しているということになる。逆に減れば、浸透していない、伝わっていないということなので、先生方は話し合いをして、改善策を考える。主体は子ども達の声なので、その声に答えがあることになり、先生の押し付けではない。子ども達の声丁寧聞きながら進めていく事業。見栄えはしない、地道な毎日の取り組みが勝負。一発花火ではなく、地道に毎日丁寧にやっていく作業。

及川委員

山学校の話や子ども達の声を確認している話、厳格になりすぎたという話を聞いていろいろ感じた。個人的な意見になるが、昔から子ども達は、必ず学校に行かなければならないと思っていたのか。不登校という括りがどうなのか。子ども達の声聞くのであれば、数ではないと思う。高血圧の数値と同じで、少々基準値を超えていても、その人が調子良ければいいという話だが、一般的には140を超えたら高血圧と言われる。30日以上休むのが不登校とあるが、子ども本人はそう思っていないのでは。本人がそこまで思っていないのに、無理やり行かせる必要があるのか。いつも引っかかる所。行きたくなる学校は、みんなが楽しいのか。行きたくない子が増えているのは、行かなくてもいいと思っている人がいるからではないか。そこを教育としてどう捉えるか。どうしても行かなければならないのか。

高橋（賢）
委員

及川委員の意見に共感する部分ある。学校は行きたくない所なのに、何故行っていたのか。友達同士で行きたくないと言いながら、何かしら楽しみがあったと思う。不登校が何故今増えているかは、答えが出ない。子どもの意識調査について、質問する。質問項目について、先生方は把握して対応しているということ。アンケート結果はお便りで家庭に届くが、個別にはどのように対応しているのか。小学生の頃は、学校での様子が家庭に届いていたが、中学生になると、通信表は見ても、合間合間の様子を聞く機会がない。居場所という話あった。教科担任ごとに、子どもの良い所・悪い所を見つけて、1人1人の光るものを見つけて、みんなに認めてもらえる、その子の居場所づくりをして欲しい。点数だけでなく、授業の取り組み方や他の子どもとの関わりは、家庭に届いているのか。不登校は学校の問題だけでなく、家庭と学校の連携が必要だと思う。うちの子どもは何もなく、平べったいから届かないのか。家庭との情報のやり取りは、小

学校と比べてどうなのか。

指導主事 小学校に比べて、中学校は家庭に様子を伝えることが希薄という意見は、確かにそう思う。小学校は、担任制のため、朝から帰りまで見ており、子どもの様子を把握しやすい。中学校は、自分の教科時間と朝晩くらい。他の先生が見つけた良い所はなかなか伝わり難いのに、悪い所はすぐ共有される。良い所を保護者に伝える方法を考えなければならないと思う。

高橋（幸） 資料P15の目標設定シートについて質問する。どれくらいの頻度で、誰がシートを書くのか。

指導主事 学期ごとなので、年3回、学期の始めに作る。「6 具体的取り組み」で先生が取り組む。原則、先生全員でやる。

高橋（幸） 毎月忙しいと思うが、どれくらい具体的に書かれるのか。これは不登校対策のものなのか、授業全体含めたものなのか。

指導主事 行きたくなる学校づくりの不登校対策は、集団指導が基本。学校全体の取り組みについて書く。

高橋（幸） そうすると、きめ細やかなところが薄くなる印象。誰々が休みがちだ、授業についていけない等、具体的な名前があって共有しないと、形式的、定型文になってしまうと思う。1月に1回とは言わないが、そういうサイクルでシートを活用して、具体的に書いてあれば、担任は、これだけ見ているよと、校長等も把握出来るのでは。全体的な話になると、先生によって差が出る気がする。不登校の理由は様々あるが、学校半分・家庭半分、担任の力だけではどうしようもない。担任の目が届いていることが分かるシートなら良いのではないか。

指導主事 ご指摘のとおり。全体計画なので、教員全員が共通目標を持って、共通で行動するための計画。学年ごとに計画を作って、具体的取り組みは学年内部で共有。1人1人の対応は、不登校や支援が必要な子ども等、学校で1人1人個別の支援シートを作っている。担任が作って、学年で共通理解し、校長まで目を通す。個別取り組みも、学校では同時にしている。

高橋（幸） 別にあればいい。今の時代、多様性という言葉が先走りしているようだ。悪く使う人もいる。多様性を認めることは大事だが、わがままと多様性は違う。ネットで見た、著名人が不登校の子ども達に向けた話を紹介する。学校は行きたくなくても、とりあえず行っておけ。楽しくなくてもいい。大人になっても小学生時代の友達とずっとつるんでいる人は少ない。友達を100人作らなくてもいい。本当に信頼できる友達が1人2人いればいい。学校は、生活をする中で、好きでもない人と平穏に過ごす訓練をする所。乱暴な言い方だが、そういう面もあると思う。行かなくても、大人になって生活できると思うが、集団行動を避けて育つと、大人になってハンディが出てくる。例えば、好きでもない人と一緒の空間にいないければならないこともあるし、上司の長い話を黙って聞かなければならない時間もある。学校は、聞きたくない話を聞く訓練の場。面白くもない話を真面目な顔をして聞くというのも、子どもの頃から訓練してきたおかげかもしれない。

い。学力だけでない。楽しくなくても、行っておくと役に立つことが多々ある。行かなくても大人にはなれるが、行っておいて欲しいというのが、私の思い。皆さんの話を聞きながら思い出したので、言葉にさせてもらった。

高橋（賢）委員 先程も話したが、学校は元々行きたくない方が多い。では何故行っていたのか。楽しい部分もあったと思うが、必ずしも楽しいから学校に行っていた訳ではなく、行かなければならない所だという思いが根本にあった。その根本的な部分が、今の時代の流れで、行きたくないなら行かなくていいという考えが、本人だけでなく、家庭・世間に出てきたことで、目立つようになったのではないかと感じる。不登校の行く先に、引きこもりがあるのも怖い。中学不登校で家から中々出られない。高校でも改善しないと、そのまま引きこもって8050問題につながる可能性もある。だからこそ、学校の頃から、好きでなくてもみんなの中でうまく過ごす術を身に着けることも大事になると思う。楽しい、プラス行かなければならない。その理由をどこに持っていくのか。根本的考え方の部分が今と昔は違うので、不登校がどうしても出てきているのではないかと思う。

議長 昔と今で目に見えて違うことは、18歳で選挙権を与えられること。6-3制の義務教育に見直しを掛けないと、不登校は止められないと思う。今の子どもは肉体的にも精神的にも大人になっている。体格も違う。先生の方が付いて行けないのではないか。昔は、学校に行くことが、何かを通して楽しかった。あの先生の授業は嫌とか、あの先生の授業は楽しいから行くとかあったことを思い出した。K先生の頃、勉強が嫌なら山に行けというゆとりあるスタイルだった。子ども達も、授業をしなくても、思いやりや人間としてしなければならぬ行動等身に着けた。先生は、そういう所を見ていたのかもしれない。言うこと聞かない子どもをコントロールするテクニックが必要。学問だけの先生では難しい。ゆとりある学校教育も大事ではないか。

武藤委員 山学校は、自分1人で、自然を相手に、楽しいことも危険なことも、何でも自己責任でしなければならぬ。友達がいれば、一緒に回避しなければならぬ。今は恵まれ過ぎ、与えられ過ぎ。現実の危険は体でないと覚えられない。情報だけ頭で分かっているけど、体験しないと分からないことがある。町で山学校を作りたい。以前、小学校の山に散策路を整備する話あった。やりたい先生もいるのではないか。わざわざ都会から田舎を体験しに来る人もいる。せつかく里山という資源があるのだから、ちょっと整備すれば可能ではないか。1日5~6時間の授業の中で1時間位、自然に触れ合う。そういう勉強の方が頭に入るのではないか。去年、海老沢分館の人が、ザリガニ釣りを実施して子ども達に好評だったと聞いた。勉強も大事だが、自然という資源をうまく利用して、体験出来る機会を作ってやることも考えて欲しい。

議長 安全面等、全て担保された場所を作らなければならぬ。来年度から計

画に着手する。キャンプ場等、子ども達が冒険できるもの。ディズニーのようなテーマパークではなく、今あるものを活かして、都会の人を呼び込んで、地域活性化につながるような事業として取り組む。

武藤委員

発想は素晴らしいが、地元の子どもが何も出来ない状況にならないか。都会の子どもは、アスレチックやキャンプに行っていると思う。地元の人こそ自然体験を知らない。かえってかわいそうな気がする。先行して地元の子ども達に体験させて欲しい。

議長

そのためには役場が変わらなければならない。地元の雇用をどう考えるか。これからはスマート農業と言われるが、インストラクターがいない。役場で抱えて人材派遣も考えている。資源を使いこなせる人材を育てたい。そういう所にお金を使いたい。何かの資金を充てることが大事。新しい資金をどう作るか。東京の企業からふるさと納税をしたいという話があった。そういう企業と一緒に町づくりを進めなければならない。学校教育も厳しいが、町の財源もどう生み出すか考えている。そういう中、教育の原点を行政が忘れては駄目だと、教育あってこそ、大郷の未来に夢が出てくる。

高橋（賢）
委員

夜でも安全に走れるランニングコースが欲しい。K先生の話で思い出した。小学校3年から6年の担任だった。今思い返すと、今に至っても人生に影響を与える程の先生だった。勉強したくない時、陣取りしよう、雪合戦しようと言え、一緒にしてくれる先生だった。午前中それをやって、午後はしっかり勉強する。厳格な部分もあるが、子ども達と対等に話し合ってくれて、怒る時は本気で怒り、メリハリがあった。1人1人の良いところを常に見て、本気で伸ばしてくれる先生だった。思い出に残っているのが、交通安全ポスター等のコンクールの時、良い絵があれば、先生の家泊まって、時間をかけて一緒に絵を書いた。当時、K先生がお昼に持ってくる弁当がおいしくて、給食と交換しながら食べた。泊まって絵を書いた朝は、奥さんのおいしい朝ご飯を食べる特典付きだった。自分の学年だけでなく、下の学年も同じようにやってくれた。今同じことが出来るか分からないが、1人の子どもの得意な部分を伸ばしてくれる、気付かせてくれる先生だった。先生側から子どもの良い所を気付く部分と、自分で良い所に気づく部分がある。今の子どもは、自分のことを分かっているのか。自分はどういう人間で、何が得意で、何が不得意か。自分自身で自分のことを分かってもいいのでは。魅力のある先生が増えるといい。

教育長

町長指摘のとおり、今の学校制度が子どもに合わないという面もあるかもしれない。平川理恵という広島県教育長がいる。制度ありきではなく、子ども達の実態に制度を合わせていこうという発想。どちらかという我々の指導は、既存の制度に子ども達を合わせる。これが教育だと思っているが、そうではないと。そういう教育は子ども達から拒否されているから、結果的に年間20万人も不登校を生んでいるという発想で、広島の教育は変わってきた。例えば、高校入試の内申書に出席日数の欄がない。何日休んだか、宮城県ではとても大事にする。30日以上休めば副申書をつ

けて、何故休んだか説明しなければならない。それを広島県では一切止めた。前歴問わない。この子どもが、何故その高校を選ぶのかという動機さえあればいい。欠席が何日あろうと、評価が何であろうと、その子どもがこの高校に入りたいから受験するというのを、1番大事にする。県のトップを変えるだけで、ガラッと制度が変わる。子どもに合った発想をしていけば、絶対制度は変わらざるを得ない。昭和50年代頃までは、子ども達に雪合戦しようと言われ、上からは叱られたが、やったりした。それ以降、締め付けが強くなって、出来なくなった。担任の指導が統一されたものになって、文部科学省で決まっている授業日数等、様々な現場を統制するものが出てきて、昔のように豊かな発想で、子どものニーズに合わせて進めることが出来なくなった。それが昭和50年代後半だった気がする。それ以降、そういう先生はいなくなったし、規模の小さい学校でも出来ない。それを良しとする管理職も少なくなった。そういう意味では、先生方も、やりたいことがあっても出来なくなったと思う。難しくなった。何を言われても、子どもが望めばという先生も昔はいたが、そういう時代ではなくなった。処分をチラつかせる管理職もいる。

議長 人づくりはハイリスク・ハイリターン。何でもバランスの問題。人間らしい、人の事が分かる人間を作りたい。学問出来る前に、人の苦勞が分かる人が1番。

武藤委員 不登校は子どもや学校だけでなく、家庭の問題ある。裕福でなかったり、片親だったり、様々な問題抱えている。しっかりした家庭となるよう、町として手を差し伸べるべき。ただお金をやるだけでなく、働ける環境を整えたり、大人も勉強に使えるお金を提供する。家庭が安定しなければ、子どもも安心して生活出来ない。年間通して支援の必要な子どもはたくさんいる。所得の底上げが必要。保健福祉課等も絡むと思うが、農業に携わってもらってもよし、行政として出来ることを考えて欲しい。

議長 以前、支援が必要な家庭の話聞いたが、その後どうか。
学校教育課長 子ども達は元気に過ごしている。母親が元に戻るのは難しい。自分のことで精一杯なようだ。本町における不登校の傾向として、家庭の問題が多いと思う。朝、親が子どもを起こして、ご飯を食べさせて、学校に行かせることが出来ないために、不登校になる例が多い。我々が担当するのは学校教育だから、中学校にいる時間まで。将来引きこもりになる可能性が高いと思われる。学校教育課、町民課、保健福祉課、学校等連携してつないでいかないと、支援が難しい。

議長 そうした家庭は町内にどれくらいあるか。年間どのくらい必要とするのか。何を準備すればいいのか。行政として、そうした問題を解消するよう努力していかなくてはならない。これは今後のテーマだ。

武藤委員 そういう安心があれば、若い人も大郷に来て安心となるのではないか。
議長 何もなくても豊かな町ということ。不登校を出さない町づくりを考えなければならない。お金ではなく、やる気の問題。米はたくさんある。

- 武藤委員 町内各所に、新築が建っている。鉄道がなくても、いい所を見出して転入していると思う。
- 議 長 共働きの若い人が増えている。夫は古川、妻は多賀城で働き、子どもにお金がかからずちょうどいい。子どもを1人作ると、固定資産税が5年間減免になる。3人で15年。
- 教育長 それを聞きつけて、けやき坂に来ている。実家がある訳でもなく、27軒全部建った。
- 議 長 家を建てても、月に4万円位払えばいい。塩釜等はアパートで7万位か。中村原地区に、もっとやるという話も聞く。大郷の水に合う人に提供できる町にしたい。大郷は給食費がかからない、0歳から18歳まで医療費がかからない。そんな町はないと自負している。何の心配もない。特徴があって、血の通う大郷と言われる学校でありたい。
- 武藤委員 先生向けの実務に沿った研修はあるのか。人として…のような話を聞く研修を企画したり、町長の挨拶を聞くだけでなく、ある程度時間をかけて、一緒に話をしたり、町の方針等聞く機会を設けてもいいのではないか。昔は、親と先生が飲んだりした時代もあった。お酒抜きでも、人づくりとして、話す機会があっていいのではないか。
- 議 長 行政と教育会が懇親する場がなくなった。特にコロナ禍の影響は大きい。コロナがなくても、交流機会なくなった。
- 武藤委員 行政は常に、仲が良い姿を子どもにみせるべきと思う。
- 議 長 行政として、出来る限り支援していきたい。

4. その他

5. 閉会あいさつ 鳥海教育長 (2:50)